

【視 点】

F. L. ライトの思想と重要文化財「明日館（みょうにちかん）」の動態保存

田島 秀夫

先日、東京・池袋にある自由学園「明日館」を見学する機会を得た。この建物は「旧帝国ホテル」で有名な米国人建築家フランク・ロイド・ライト（1867～1959）と建築家遠藤新（えんどう・あらた）によって設計され、1927年に全棟が完成した。1921年に最初の教室が完成した後、関東大震災（1923年）や太平洋戦争の災害を免れ、今日まで80年に亘って保存されてきた。

明日館は、池袋西口の高層ビル街から一街区入った閑静な住宅地にある。芝生が敷き詰められた前庭には桜の大木が古色蒼然と構え、建物はコの字型で、ホールと食堂を中心に左右対称に教室等が配置されている。緑色の低く大きな屋根が印象的である。軒高を低く抑え水平線を強調した立面や幾何学的な建具の装飾は、「プレーリーハウス」と呼ばれる一連のライト作品の意匠を象徴している。また、日本に残るライト建築の特徴である大谷石がここにも多用されて重厚感を与えている。建物の基本的な構造が今日の2×4工法の先駆けになったと言われていることから、明日館の永い歴史がうかがえる。

明日館の前に立つと、コの字型の建物が我々を両手で迎え入れてくれるような感覚に襲われる。明日館には、無意識のうちに引き込まれてしまうような不思議な包容力がある。この魔力とも言うべき包容力はどこから湧き出てくるのだろうか。

F. L. ライトは1909年、40歳にして早くも独自の新しい建築を確立し、それを「有機的建築」と名付けた。彼は人々のために、自然で快適、そして何より敷地に調和した生活の場を愛情込めて作り出している。彼は常に、独自に確立した有機的建築の原理に基づいて建物の設計・建築にあたった。

このようなライトの思想が具現化されている明日館は、完成以来学校法人自由学園によって手厚く維持されてきたが、1997年に当時の文部大臣がその文化的貴重性を認めて重要文化財に指定された。その後、近年の著しい老朽化に対応するため、国および東京都の補助事業として総額7億6500万円の保存・修理工事が1999年から行われ2001年9月に完工した。

文化財保護法では、所有物が重要文化財に指定されると、その所有者に対し、管理方法が指示され（同法30条）、保護（修理）および公開が義務づけられる（同法34条の2および47条の2）。ただし、管理または修理に多額の経費を要しその負担に堪えない場合には、費用の一部が補助金として交付される。また、文化庁長官が命ずる修理は国庫負担とされている。

明日館は、使いながら文化価値を保存する、いわゆる動態保存を志向し、オリジナルの建築美を損なわないように配慮しながら利便性の向上のために可能な範囲での現状変更を

図った。動態保存している施設には、講演会、コンサートのできる講堂、生涯学習教室、創作展示販売館などがあるが、維持管理費の捻出には苦心しているようだ。また、前述の補助事業の際にも、事業費の25%は(学)自由学園が負担しなければならなかったし、動態保存のために整備した冷暖房設備の工事費なども自己負担であった。

そこで、私からの提案であるが、明日館のように重要文化財を動態保存する場合には、貴重な国民的財産であることを考慮して、動態保存に必要な費用は維持管理費も含め全額を国庫負担とすることが一つの解決策になるのではないだろうか。

百聞は一見にしかず、まずはご見学されることを是非お勧めしたい。

【たじま ひでお】

【(財)土地総合研究所 常務理事】